

知的障害特別支援学校中学部における地域社会・産業と 連携した職業教育に関する研究

名古屋 恒彦^{*}・名須川 美智子^{**}・田淵 健^{**}・田村 英子^{**}・岩井 雅俊^{***}

(2009年9月29日受理)

Tsunehiko NAGOYA, Michiko NASUKAWA, Ken TABUCHI, Eiko TAMURA, Masatoshi Iwai

A Study of Career Education that Cooperated with Regional Society and Industries at Lower Secondary Departments
of School for Special Needs Education (for Children with Intellectual Disabilities)

1 問題と目的

近年、障害のある人たちへの就労支援施策の進展が著しい。2002年に示された「障害者基本計画」において、「雇用・就業は、障害者の自立・社会参加のための重要な柱であり、障害者が能力を最大限発揮し、働くことによって社会に貢献できるよう、その特性を踏まえた条件の整備を図る」とする方針が示され、施策の具体化が方向付けられた。2005年に成立した障害者自立支援法においても「就労移行支援」「就労継続支援」といった様々な形態での就労支援が重要な位置を占めている。2008年3月に告示された特別支援学校学習指導要領においても、「地域や産業界等と連携し、職業教育や進路指導の充実を図ること」とされている（文部科学省、2009）。

就労支援を特別支援教育で引き受ける場合の中核的な教育活動は職業教育である。職業教育に関して、名古屋らは、知的障害特別支援学校における職業教育に関する実践研究が、高等部段階のものに比べ中学部段階で低調であることを指摘している（名古屋、稲邊、田村、田淵、2008）。2008年1月に公にされた中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支

援学校の学習指導要領等の改善について」においても職業教育に関する記述は高等部段階に関するものである（中央教育審議会、2008）。また、前述の特別支援学校学習指導要領においても職業教育にかかわる具体的改訂は高等部に関する事項である（文部科学省、2009）。

名古屋らは、特別支援教育における職業教育への関心が高等部段階を主とするものであることに対して、職業教育が義務教育最終段階である中学部においても重要であるとの認識に立ち、岩手大学教育学部附属特別支援学校（以下、「附属特別支援学校」）中学部における作業学習及び働く活動を中心とした生活単元学習の授業研究を通じて、知的障害特別支援学校における職業教育の在り方を検討した（名古屋、稲邊、田村、田淵、2008；名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009）。

その結果、名古屋らは、職業教育としてふさわしい作業活動として、現実度が高く、かつ生徒が主体的に取り組めることを重視して授業研究を行った。その結果、現実度の高い作業活動としては、学校が立地する、あるいは生徒が居住する地域での産業基盤との関係重視も十分に考慮されることが必要であることを指摘した。持続可能な材料の

* 岩手大学教育学部特別支援教育科、** 岩手大学教育学部附属特別支援学校、*** 岩手県立盛岡となん支援学校

入手、作業ノウハウ、販路開拓などでの地域産業との連携の重要性が考えられた。地域産業との関係での材料入手については、附属特別支援学校が立地する地域でのリング栽培で恒常的に生じる剪定材を再利用した製品開発が提案された。このことは環境への配慮としても有用であった(名古屋、稲邊、田村、田淵、2008)。作業学習(新設の中学部クラフト班の事例)では、地域産業との連携がスムーズな作業活動のスタートにつながることが明らかにされた。このような好条件は、より持続可能でかつ生徒主体、現実度の高い作業展開を指向できることが示唆された(名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009)。

さらに、職業教育が単なる作業能力の訓練ではないことを考えれば、地域産業との連携の過程での地域の方々との関わりの深まりは、社会の中で生きていくことの良さを生徒たちが自然に感じる貴重な機会であることも示された。産業という枠だけでなく、働く活動を通じて、地域の方々と共にある生活を深めていくことも、実践上の課題とされた(名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009)。これらの先行研究のキーワードともいえる「地域産業」を「地域社会」と拡大して検討することも今後の課題となり得る。

そこで本研究では、以上の名古屋らによる先行研究を踏まえ、附属特別支援学校中学部で実践される作業学習(クラフト班)及び、働く活動を中心とした生活単元学習の授業研究を通して、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域社会・産業に密着した持続可能な環境教育に資する職業教育の展開方法を明らかにすることを目的とする。

2 方法

本研究では、以下の三つの方法を実施する。

(1) 附属特別支援学校中学部における授業研究会

2007年6月から10月の期間、附属特別支援学校中学部において実施されたクラフト班作業

学習及び働く活動を中心とした生活単元学習の授業研究会を実施する。

対象授業は以下の4単元である(各単元の概要及び目標は資料1～4参照)。

○生活単元学習「もっと！もっと！きれいに蝶ヶ森」(6月9日(月)～13日(金)実施。以下、「蝶ヶ森単元」)

○生活単元学習「あにわ広場を作ろう」(9月8日(月)～9月19日(金)。以下「広場単元」)

○作業学習「あにわ祭で販売しよう」(クラフト班、10月20日(月)～30日(木)実施。以下、「クラフト単元」)

○生活単元学習「注文OK！きれいにしよう中野地区活動センター！！」(10月1日(水)～10月17日(金)。以下、「中野単元」)

授業参観は、各授業ごとに期間中1回を名古屋が参観する(なお、「蝶ヶ森単元」は名古屋は参観できなかった)。名須川は中学部主事であり、田淵、田村、岩井はクラフト班授業者であった。

授業について筆者らによる検討会を実施する。生徒主体の活動であったか、現実度の高い作業展開であったかを観点とし、発言を、①単元の計画に関して、②場の設定・道具等の工夫に関して、③共に活動しながらの支援に関して、の三つの枠組みで整理し、筆者全員で内容を確認の上、記録とする。なお、この三つの枠組みは名古屋らによる主体的作業活動を実現する支援的対応の枠組み(名古屋、稲邊、田村、田淵、2008)に基づいて本研究でも用いたものである。

検討会の日程・内容は以下の通りである。

○第1回(2008年6月20日(金))：対象授業の全体計画確認。

○第2回(2008年6月26日(木))：「蝶ヶ森単元」の授業研究。

○第3回(2008年10月7日(火))：「広場単元」「クラフト単元」の授業研究。

○第4回(2008年10月9日(木))：「中野単元」の授業研究。

(2) 他の特別支援学校における中学部作業学習

等の視察・資料収集

ここでは、筆者の一人である名古屋が、継続的に関わりをもつ特別支援学校における作業学習及び生活単元学習の視察と資料収集を実施し、担当者間で情報を共有する。

(3) まとめの検討会

授業研究、視察・資料収集の結果に基づいて、望ましい作業学習及び生活単元学習の在り方の検討を行う。

検討会の実施は、2009年1月16日（木）である。

筆者らによる検討会を行い、本研究の目的に即した望ましい作業学習及び生活単元学習の在り方を検討する。検討会での発言記録をとり、筆者全員で内容確認の上、正式な記録とする。そこでの検討内容分析から、主体的取り組みを実現するための手立ての開発、地域社会・産業に密着した持続可能な環境教育を含意した授業計画のあり方を明らかにする。

3 結果と考察

(1) 授業研究会

①授業研究会結果

各授業の検討会記録は資料5～8の通りである。

②授業研究会結果の考察

検討の三つの枠組みから考察する。

「単元の計画に関して」では、単元のテーマが身近な地域や校内での活動にかかわることであり、見通しをもちやすく、かつ意欲的な活動につながったことが確認された。また、いずれの単元も、前年度の生活単元学習の成果を引き継ぎ、土木活動を中心とするものであった。これまでに馴染みのある取り組みであり、生徒一人ひとりの活動内容も、これまで慣れてきた活動をベースに行われたため、見通しや習熟の点でよい成果が報告されている。グループ活動を行うことで、活動での励まし合いや競い合いなどが生まれ、取り組みへの勢いがもたらされた。活動量の保障も、存分

に取り組めるためには有効であったことが指摘された。地域での働く活動は、活動の過程で、地域の方々との自然発生的な交流が生まれ、自然発生であるがゆえに、その経過も自然で実際的なものとなっていた。

「場の設定・道具等の工夫に関して」は、場の設定については、活動しやすさの観点から場を選択することの重要性が確認された。道具等では、個々の道具の本格化が進み、そのことが生徒の活動しやすさや意欲につながったことが指摘された。一方で、なおいっそうの道具の工夫が課題とされた。なお、不定形材加工の難しさは、前年度に引き続き、指摘されている。

「共に活動しながらの支援に関して」では、教師が共に活動することで、テーマの共有ができること、適時な支援ができることなどが指摘された。生徒一人ひとりへのできる状況づくりが行き届くことで共に活動しやすくなることも確認された。

(2) 他校の視察・資料収集

①視察・資料収集結果

視察および資料収集を行った特別支援学校は、県外5校（山形県2、長野県、石川県、熊本県）であった。いずれも知的障害対象校である。

働く生活単元学習では、長野県の特別支援学校での竹炭製品作りがあった。屋外作業と屋内作業に分かれ、多様な工程で作業を進めていた。屋外では大型の道具を用い、本格的な労働活動が展開されていた。竹炭製品は地域での販売を目指しており、地域とのつながりが意識された取り組みであった。

作業学習は5校すべてで行われていた。特に山形県、長野県、熊本県の学校では、販売活動を軸に、質の高い製品作りを行っていた。販売というテーマ、工程の分業化、本格的な道具の導入などが共通していた。熊本県の学校では、地域にある素材にこだわった作業活動も展開されていた。視察した学校全てが県立学校であることから、知的障害対象校とはいえ、肢体不自由等の障害を併せ持つ生徒が活動しており、その生徒たちへの道具等の工夫による支援の個別化が図られていた。石

川県の学校では、障害が重いといわれる生徒が活動できるため、自作の道具（ラジコンカーを利用し、スイッチだけで線が引ける道具）の工夫が注目された。

②視察・資料収集結果の考察

今回の視察・資料収集では、屋外の本格的な生活単元学習や販売を目指した作業学習ということで、本研究における対象授業と共通する取り組みに接することができた。意欲的に取り組めるテーマや地域とのつながり、分業化、本格的な道具使用といった点で、それらの共通点が指摘できる。一方、障害を併せ持つ生徒への対応などから、既存の道具ではないものを工夫して道具にするという取り組みも認められた。このような取り組みは、ともすれば作業活動の現実度を損なうこともある。そこで、実際的な活動になり得ることを担保していることが条件になるが、その条件を満たしていれば大いに参考になるものであると考えられる。

（３）まとめの検討会

①まとめの検討会結果

まとめの検討会の記録は資料9の通りである。

②まとめの検討会結果の考察

「単元の計画に関して」は、生活単元学習では、支援の下で、活動を繰り返すことで、主体的活動や習熟が実現できたことが指摘されている。活動を繰り返すためには、適切な分担と道具等の支援、さらには繰り返しを可能にする活動量が不可欠である。対象授業の単元期間はそれぞれ異なっていたが、これらの条件を満たすことで、それぞれに主体的な取り組みが実現できたと言える。地域とのつながりでは、地域交流を目指したのではないことが、自然な地域交流につながるという逆説的な見解が示されているが、地域での必要感を生徒たちと地域の方々が共有することによって、無理なく、しかも思いを共にする共同作業ができたものと考えられる。

作業学習では、地域に直結したということで、近隣のスーパーでの販売を行ったものの、その成果は不調であった。販売活動の場合、「地域」を

安易に近隣に限定せず、幅広く捉えることが必要であることが示唆された。

「場の設定・道具等の工夫に関して」は、生活単元学習では、授業進行における改善の必要性和その成果として生徒が自ら工夫して道具を使う場面が見られたことが報告された。扱いやすい道具であればこそ、仕事への意欲が生まれ、より上手に、という思いに裏打ちされた生徒自身による工夫がなされたのではないかと考えられる。

作業学習では、材料入手について、リンゴ栽培や公園管理の過程で出る剪定材を地域農家等に求めたことで継続的な材料入手を可能にした。剪定材は産業面では不要物であり、それに着目したことは環境教育の一環として評価できよう。一方、不定形材加工を作業に伴うことになり、従来の道具では難しく、なおいっそうの教材研究が求められる。

「共に活動しながらの支援に関して」は、生活単元学習では、教師が共に活動することと生徒への支援の精度の関係が指摘されている。作業学習の検討ではこの面での指摘は特になされなかったが、活動を分担して取り組むことは、生活単元学習と共通している。

4 総合考察

本章では、知的障害特別支援学校中学部における生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域社会・産業と連携した職業教育について、働く活動を中心とした生活単元学習及びクラフト班作業学習の授業研究への考察を中心にしつつ、総合的に考察する。

本研究では、名古屋らの先行研究（名古屋、稲邊、田村、田淵、2008；名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009）の発展であるが、授業研究では、働く活動を中心とした生活単元学習3件とこれまでの研究以上に生活単元学習への検討を多く行った。その結果、地域での必要感と切り結んだ単元を継続して行うことで、学校における教育活動と

地域生活の連続性が高まったと考えられる。地域の方々が、自発的に作業活動に参加してくださったことは、その成果の表れであった。特段に交流を意識しない、地域生活の仲間としての活動が、必要感や目標を共有する自然な関係を生み、地域社会でのあるべき当然の生活を実現できたと考える。前述のように、「地域交流」という教育上の課題を意識しないことが奏功したことは、自然で長続きする（すなわち持続可能な）「交流」という教育活動のあり方に一つの方向性を提案するものであろう。

しかし、このような自然な活動の共有も、生徒たちにできる状況があってこそである。生徒の活動が見通しをもちにくかったり、取り組みにくかったりすれば、活動を停滞し、指導場面が多くなる。こういう状況では、「指導の妨げになってはいけない」などの思いが介在し、地域の方々が自発的に活動に参加するという契機は得にくいのではない。生徒一人ひとりが精一杯取り組んでいる授業だからこそ、活動への共感を呼び、共同性を高めていくものと考えられる。そのための状況づくりの成果と課題は、場の設定や道具等の工夫をはじめ、様々な場面でそれぞれの授業で行われていた。今後も普段の教材研究と他校の実践からの学びなどを通じてできる状況づくりの充実が求められる。

作業学習においては、先行研究で示してきたように地域産業に材を求める活動が軌道に乗りつつある。地域産業と環境という二つの教育課題を考える上でも有効な取り組みであった。一方で販売では、必ずしも近隣地域での継続的購入にはつながらない点が指摘された。製品を購入者のニーズに合わせていくことと同時に、幅広い販路開拓をさらなる地域展開としていくことも課題であろう。

生活単元学習であっても作業学習であっても働く活動を展開することで、職業能力の高まり、働く生活の充実が意図される。働くことは地域社会をその場としてこそ、社会生活活動としての意義を確かにする。その点で、本研究で対象とした授

業は、単元テーマにおける地域の必要感、材料・活動内容における地域との連携、結果（完成・活用、販売など）における地域とのつながりというように、職業教育と地域との様々なつながりの視座をしめすことができた。今後、なお活動の必要感や自然さに裏打ちされた地域との関係性豊かな作業活動を構想していきたい。

注)

・本研究は平成20年度学長裁量経費萌芽的教育研究支援経費によって行われた。

文献

中央教育審議会（2008）：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）。p. 135.

文部科学省（2009）：特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）。教育出版, pp. 6-7.

名古屋恒彦、稲邊宣彦、田淵健、大嶋美奈子（2009）：知的障害特別支援学校中学部における地域産業と連携した職業教育に関する研究。岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第8号, pp. 161-171.

名古屋恒彦・稲邊宣彦・田村英子・田淵健（2008）：知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究。岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第7号, pp. 175-182.

＜資料1＞生活単元学習「もっと！もっと！きれいに蝶ヶ森」の概要

○単元について

本単元は、中学部の1学年男子7名、2学年男子5名、3学年7名（男子4名、女子3名）の19名の生徒で取り組む。

昨年度、中学部全員で、生活単元「きれいにしよう蝶ヶ森」に取り組み、学校裏にある蝶ヶ森の頂上に花壇作りや展望台の塗装作業を中心とした整備を行ってきた。

そこで本単元では、新年度に入り、雪解けし、草花も育つこの時期に、花壇を整備し、いっそうきれいな蝶ヶ森として花の季節を迎えることにする。

実際の取り組みでは、昨年度の活動を生かしながら、「土+花壇作りグループ」「植えこみグループ」「花壇杭作り+看板作りグループ」の三つのグループに分かれて取り組む。新1年生も先輩と共に活動する中で、期待感と見通しをもって取り組むことを願う。

○目標

- 中学部全員で力を合わせ、花壇作りや看板作り、クローバー作りなどに取り組み、蝶ヶ森の整備をやり遂げる。

<資料2> 生活単元学習「あにーわ広場を作ろう」の概要

○単元について

本単元は、中学部12名で取り組む。

中学部の生活単元学習では今年度余暇の選択活動の他に、蝶ヶ森展望台の花壇の新設及び整備活動といった身近でなじみ深い校外での活動を中心に行ってきた。

花壇づくりの活動は被服室のベランダを出入り口として、中庭を通ってから進めた。また、中庭は今年度から中学部作業学習「園芸班」では、大きくなりすぎた木を伐採して片付ける活動を進めてきた。活動を進める中で生徒たちからは「切っているうちに中庭が明るくなった」、「広場が広がってきた」といった声が聞かれた。また、職員からは「来年の学校公開の際、昼食場所として提供したい」、「中庭で焼き肉が食べたい」といった意見もあった。生徒からは広がった庭に「畑を作って何か食べられるものを植えたい」という意見も出された。

そこで今回は中庭の整備・広場づくりと畑づくりをおこなうこととしたい。畑には時期的に定植に適しており、来春に収穫が期待できるいちごを植えることとする。蝶ヶ森の

花壇づくりは昨年度からの継続した活動であり、生徒たちも「土づくり」「花壇杭づくり」といった活動に見通しをもちながら、自分から活動に取り組む姿が多く見られるようになってきた。今回も蝶ヶ森での活動をベースにしながら、継続や生徒の実態を重視しながら、「土」「木」を活動の中心とする2グループで活動を進めることとする。

活動を進めるにあたっては、生徒が自分の力を発揮して主体的に活動に取り組むことができるよう環境の整備を図りながら支援をしていき、中庭の整備が進むことで、意欲ややりがいを得られるようにしていきたいと考える。

○目標

- それぞれが、主体的に活動に取り組み、中庭の整備や畑作りをする。
- みんなで力を合わせ、中庭がきれいになったことの喜びを味わう。

<資料3> 作業学習「あにわ祭で販売しよう」(クラフト班)の概要

○題材について

中学部のクラフト班は、周辺地域で伐採されたリンゴや山桜などの木々を材料とした自然の風合いを生かした製品づくりに取り組んでいる。今年度は1年生2名、2年生1名、3年生3名の計6名で編制されている。全員が今年度から初めてクラフト班での作業に取り組んでいる。工具等を用いた木工作業に対して強い興味をもつ生徒や、反対に不安を感じていた生徒もあった。安全に作業を行ってほしい生徒には、補助具の工夫をすることにより、自信をもって一人で工具を扱うことができるようになってきている。また、作業がやや雑になってしまっていた生徒は、販売することにやりがいを感じるようになり、よりきれいに製品を仕上げようと意識しながら取り組むことができるようになってきている。実態は様々であるが、支援の工夫と継続によ

って、それぞれが自分の役割を理解し、時間いっぱい働くことができるようになってきている。また、分業により一つの製品が完成されていくことにも見通しをもってやりがいを感じることができるようになってきている。

本題材では、学校の大きな行事の一つである、「あにわ祭(学習発表会)」における売店で、自分たちの作った製品を販売する、という活動を主たるテーマにし、これまでも製作してきた写真立てとマグネット（あにーわという名称のマスコット付）と、新製品となる鉢カバー（ミニ）を製作することとした。販売するために製品づくりを行っているということはこれまでも伝えてきてはいるが、実際に生徒自らが販売する機会がこれまでなかった。今回、自らが直接お客様に販売するという実際のテーマを設けることで、より意欲的に取り組むことができるものと考えられる。

○目標

- それぞれの工程において、時間いっぱい主体的に働くことができる。
- 販売することを目標とし、意欲的に作業に取り組むことができる。
- 安全に注意しながら、正確で丁寧な作業ができる。

<資料4>生活単元学習「注文OK！きれいにしよう中野地区活動センター！！」の概要

○単元について

中学部の1学年男子7名、2学年男子5名、3学年7名（男子4名、女子3名）の19名の生徒で取り組む単元である。

中学部ではこれまでも、地域の資源を活かして材料等を調達し、作った物を地域で販売しようとして取り組んできた。

花壇作りの活動は、昨年度から行っている「蝶ヶ森」の花壇を作る活動を活かしながら、今回、初の『注文を受けて作る活動』として、生徒にとってはより实际的、現実的な、一歩

社会に迫った活動として展開することとなった。

教師の地域への働きかけという支援はあったものの、実際の活動では「蝶ヶ森」の花壇作りでも、生徒の力で花壇作りを成し遂げることができた。一度、経験した花壇作りは、場所が変わっても、依頼を受けて行う活動としてより生徒達に意欲をもたらしものと考えられる。

本単元は外部からの注文で行う活動であり、実際の活動でもあり、擬似的体験ではない。まさに、地域社会と生徒との関係の中で展開される『本物の活動』として生徒が真剣に取り組む場であり活動となることを願い設定した。

本単元では近隣の中野地区活動センターに花壇を作るために「中花壇グループ」「外花壇グループ」「校内土作りグループ」「杭作りグループ」の4つのグループに分かれて取り組む。

実際に行う活動では、個が十分に力を発揮できる支援を吟味し、支援具等を十分に工夫することをはじめ、共に活動する生徒や教師の姿をも支援として、どの生徒も継続して活動し続けられる学習内容に取り組む。学習活動の展開に応じて、活動の質を高められるよう支援し、さらに改良を加えながら、教師自身も十分にその活動に入り込み活動を肌で感じ、支援を吟味しながら取り組む。

○目標

- それぞれが、自分の役割において主体的に力を発揮し、中野地区活動センターの花壇作りをする。
- みんなで力を合わせ、中野地区活動センターに花壇を作り上げたことの喜びを味わう。

<資料5>「蝶ヶ森単元」検討会記録

①単元の計画に関して

- 5日間という短期間の単元でありながら、

生徒たちが主体的に取り組んでいた理由として、以下があげられる。

- 昨年度取り組んだ単元が続く活動であり、テーマ意識がもちやすかった。
- 2、3年生は経験者であり、活動に見通しをもっていたため、流れができていた。
- 初めて取り組む1年生にとっても、毎日のミニ登山で花壇に馴染みはあり、かつ先輩たちの話題に上ることもあり、身近な単元テーマとなっていた。
- 2、3年生は昨年度の単元での活動グループを多くの生徒が継続したことで仕事に入りやすかった。
- 1年生についても、今年度はすでに作業学習で二つの単元を終えており、そこでの様子から分担を考えたことで、適切な活動を用意しやすかった。
- 分業で活動を繰り返したことで、一人ひとりの仕事のペースアップが早かった。
- 毎日活動を繰り返していることで、1年生の中にも登校すると「今日も花壇やるぞ」というような言葉が聞かれ、見通しや意欲をもちやすかった。これまで小学校で「仕事は苦手」とされていた生徒も意欲的に取り組んでいた。
- 活動量が十分にあり、存分に取り組める毎日であった。
- 家庭での日記の内容や表現が充実してきた、生活リズムが整ったなど、単元を中心とした生活の中で、家庭生活にも良い影響が認められた。意欲的に存分に取り組む生活の結果と思われる。
- グループで共に活動することで、お互いにもっと働こうという仕事への競い合いなどが見られ、意欲的な活動が展開できた。
- 見通しをもって、意欲的に取り組める状況下で、生徒なりの仕事の工夫などが見られた。
- 本単元で働く活動に取り組んだことで、続

く単元でも意欲的な仕事ぶりが見られた。

- 元町内会長の方をはじめ、地域の方々から折々に励ましてくださり、地域で働くことの良さを確認した。
- 前年度の単元以来、市役所公園みどり課の方も花の種の提供等、円滑な連携が図れた。
- 生徒によっては、活動分担の見直しが必要な生徒もあり、今後の単元計画の課題である。
- 単元の進行を生徒会生徒がより前面に出て、行えるようにしたい（完成祝賀会など）。
- 秋に実施予定の中野地区活動センターでの取り組みも地域での良い活動が期待できるが、蝶ヶ森に比べ、馴染みが薄いので、行事参加、販売会開催などセンターに馴染める方略も考える必要がある。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- 花壇作りでは、土作りの場と花壇が近くに設定されており、土を運ぶ生徒の動線が分かりやすかった。
- 木工等では、本格的な機械を使用していることが生徒の意欲につながっていた。
- 土作りのふるいは、大型であり、生徒の様子に応じていくつかの種類を用意してあったこともあり、複数の生徒が一度に土をふるえる等、効率的だった。より効率化を図るために、ふるいの数を増やすことも検討したい。

③共に活動しながらの支援に関して

- 教師も生徒と共に存分に働けたことで、やりがい共有できた。
- 生徒によっては、教師がそばで、あるいは一緒に仕事を進める方がペースを作りやすい生徒もいた。今後、教師の配置が課題となる。

<資料6>「広場単元」検討会記録

①単元の計画に関して

- 単元設定にあたって、園芸班で行った中庭

剪定作業の発展という展開は、生活の必然性や自然性を担保し、生徒たちにもわかりやすい取り組みとなった。花壇作り等も生徒の声としてあり、自然に単元活動がふくらんだ。

- 活動の分担は、前単元「もっと！もっと！きれいにしよう蝶ヶ森」等での取り組みを生かして、生徒に合った活動を用意することができ、意欲的な仕事につながった。本単元の取り組みは現在展開中の単元にも反映している。
- 社会的に有用なものを作ることによるやりがいとは別の、「自分たちが楽しむために」という目的での取り組みも、テーマ設定としては、やりがいにつながるものであった。教師にとっても「楽しい」取り組みであった。
- 大学の農場の方から土作りに関するアドバイスをいただいたことが良かった。
- 「あにーわ広場」を作る、という目的がはっきりしており、かつ生徒たちも意識していたことが意欲的な活動に有効であった。
- 作業内容によってグループに分かれての活動であったが、それぞれ手を休めずに仕事を進める姿が多く見られた。分担は適切であった。
- それぞれの生徒に十分な活動量があったことも存分に活動できるために有効であった。
- 木材の塗装では、防腐剤と塗料を塗り分けるようにしたが、担当の生徒は、手順を覚えてうまく進めることができた。活動分担が適切であった。
- 複数の単元（作業学習も含め）で継続して同種の活動に取り組むことで活動の習熟（伐採作業では作業量が2～3倍にあがるなど）の成果が見られた。
- 地域の剪定材だけでなく校内の伐採材も花壇杭等に利用できたことは、材の供給の幅を広げ、かつ無駄のない持続可能な展開と

して良い条件であった。

- 本単元では、校地内に常設物を作ったが、校内の連携・協力体制があったことで実現できた。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- 旧陶芸室を活動の場の一つとしたが、広さがあり、コンクリートのたたきで堅牢であり、機械も置け、仕事が進めやすかった。
- グループに分かれて仕事を進めたが、グループごとに場も離れていた。しかし、動線がつながっている部分もあり、その点では活動しやすさに大きな支障はなかった。
- 自然木という不定型材の扱いは本単元でも難しさを感じた。
- 磨きの仕事では、サンダーをかける台の高さや可動であることなどが仕事の進めやすさにつながっていた。
- 各工程での材料（木材、土）の量が十分にあったこと、花壇の面積が大きかったことなどは存分に活動できる条件になっていた。
- 混合土作りでは、生徒によってはスコップよりも、鋤のようなもので攪拌する方がよかったのではないかな。

③共に活動しながらの支援に関して

- 生徒一人ひとりに自分で活動できる状況が用意されていたことで、教師も生徒と共に存分に働けた。

<資料7>「クラフト単元」検討会記録

①単元の計画に関して

- 「あにーわ」（写真立て）作りでは、各工程がスムーズに流れており、安定した展開であった。
- 2人（生徒1人、教師1人）が、次単元で行う新製品用の材切り出しに取り組んでいた。概ね作業は継続できていたが、これまでとは全く違う材の切り出しだったこともあり、のこぎりの使用法、材の選別などが難しかった。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- ベルトサンダーがけの工程では、タイマーで削る時間を決めていたが、時間で決めるのではなく、削れた量で決められればよいのではないか（補助具の工夫で）。
- 作業室の吸塵に課題がある。改善と同時にマスクの使用も考えてよいのではないかな。

③共に活動しながらの支援に関して

- 新製品用の材切り出しでは、やはり不慣れな仕事であったことから、教師の指示や手助け、教師による良否判断などが目立ってしまった。

◎新製品（筒型の植木鉢または花瓶カバー）についての検討

- 縦に配置した枝材が少し開いた方が花瓶などには入りやすいのではないかな。
- 供給される材の規格によって、同じ製造工程で、花瓶カバー、ペン立てなどいくつかの規格品を作ってはどうか。
- 今回、不定型の枝を定型の材に加工できる道具を導入した。このことで材の加工がしやすくなった。
- 底板の厚さをもう少し薄くした方が、見た目の重さを軽減できるのではないかな（インテリアとして）。
- 今後安定供給しやすいという細めの材を用いての製品開発が必要である。
- 園芸班で伐採した材を材料として使用することは今後考えられる。
- 「あにーわ」の顔を残したい。定型材への加工技術を使って「あにーわ」の顔をつけたメモホルダーが作れるのではないかな。
- 「あにーわ」の名称、顔をブランドにしてはどうか（焼きごて等）。

<資料8>「中野単元」検討会記録

①単元の計画に関して

- 規模の大きな活動であり、存分に取り組める程に活動量が豊富であった。
- グループに分かれての活動であったが、そ

れぞれのグループが作業の性格が異なるものであり、より生徒に合った活動を用意しやすくなっていた。と同時にグループごとにまとまりや勢いが感じられた。

- v 自然な流れで作業に入り、終了は時間で目処をつけ片付け、コンパクトに活動の確認を行って終了、という流れは自然で生徒の活動に無理がなかった。
- 活動を繰り返す過程で、雨によって土が固くなるなど、自然環境によって条件が変わっても子どもたちが柔軟に対応できるようになった。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- 4つのグループの活動の場が、大きく二つに分かれていたが、仕事の性格上はやむを得ないと思われる（それぞれの場は機能的であった）。しかしながら、今後なるべく一体的な場で同様のクオリティを有する活動を計画することは課題としたい。
- 花壇作りの手立てである水系は、目安として機能していた。花壇全体の施工イメージを持ちやすくするために、あらかじめ4辺すべてに水系を張っておいてはどうか（その場合、邪魔にならないように細く伸縮性のある本来の水系で）。
- 土掘りのスコップは生徒によっては大きめのものであってもよいのではないかな。
- バケツは耐久性・口の広さなどの点で金属製への切り替えを進めてはどうか。
- 土掘りのバケツ置き場（土を入れる場、運び込む場それぞれ）をコンパネ等で作ってはどうか（土掘りの進度に合わせて可動式）。土入れの際、安定感を欠き、バケツが倒れることがあった。またバケツを運び込む場も十分に定まっていなくて生徒の動線と重なる場合があった。
- 杭の設置は、掘り下げはツルハシ、土寄せはレーキや鍬といったもので立って進められた方が、効率がよいのではないかな（ツルハシと鍬の中間のようなものがあれば1本

ですむが)。

- 土ふるいは大きめのバケツ1杯がちょうど一袋になっており、見通しがもちやすくかつ機能的であった。
- 一輪車を使った土ふるいでのふるい用の金網にも枠を設けてはどうか。こぼれず確実にふるえるように。あるいは一輪車にこだわらずこちら舟で土を受けるなど。

③共に活動しながらの支援に関して

- 本単元においても、教師が自身の分担仕事に存分に取り組める場面が多く見られた。活動選択、道具等の手立てが行き届いていたためと思われる。
- 共に活動する教師は、生徒に対し、共感的な対応がしやすくなる(共に働く仲間になる)ということがどのグループでも非常に強く感じられた。

＜資料9＞まとめの検討会記録

(1) 生活単元学習(「蝶ヶ森単元」「広場単元」「中野単元」)の総括

①単元の計画に関して

- 単元の中で自発的にお手伝いくださる地域の方との出会い等、より身近に地域を感じることができた。
- 「地域交流」を目指したのではなく、「○○を作ろう」という明確な目標をもって取り組んだ、その場がたまたま地域であったということが、かえって自然な地域の方々との関係の深まりにつながったように思う。明確な目標がなければ続かなかっただろう。「地域交流」を目指さなかったことが、持続可能で発展可能な地域の方々との交流の深まりの要因の一つと考えられる。
- 単元期間はそれぞれ違っていたが、期間に見合った存分に取り組める活動量があったことが、毎日の主体的な活動につながった。
- 様々な支援の工夫で活動の繰り返しが実現し、より主体的な活動や習熟が見られた。
- 三つの単元で、テーマは違っても類似した

活動を繰り返したことが生徒の取り組みやすさにつながった。

- 単元ごとに生活のテーマが変わっても生徒たちに戸惑いなく切り替えができていた。
- 毎日の日課も同じ流れであり、かつ中心の働く単元と学級での緩やかな時間のメリハリがあり、生徒たちは見通しをもって生活しやすかった。
- 仕事は分業で進めたが、自分の仕事だけでなく互いの仕事分かっている様子の生徒が複数がいた。
- 保護者の声として、年度当初は教科別授業を望んでいたが、「そこまで働かなくても」という思いがあったりしたが、単元を積み重ねる中で、「もっと子どもを頼りにしてよいのだ」「生活年齢相応のことができることがわかった」「家でも仕事をするようになった」といった、肯定的な評価に変わっていった。生徒の活動を認めていただいたものと思う。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- 道具等の改善は授業を進めながらも随時行っていたことでより最適化でき、継続的な活動につながった。
- 道具を使っているうちに、生徒自身が使い方を工夫し、より良く活動する姿が見られた。「支援具」というより「自助具」ともいべきものであった。

③共に活動しながらの支援に関して

- いずれの単元でも、誰が生徒か教師かわからないほど、教師も働いていた。活動量が存分にあったことと、生徒への支援が行き届き、手助け等する必要が少なくなっていたためと思われる。

(2) 作業学習(「クラフト単元」)の総括

①単元の計画に関して

- 新製品として後半に開発し、近隣のスーパーで販売を行ったが、なかなか売れなかった。製品の特徴に見合った販路開拓が今後の課題である。

- 販路開拓を次年度早々に単元化してはどうか。

②場の設定・道具等の工夫に関して

- リンゴ材は地域農家より、桜材は市公園みどり課より継続的に入手可能となった。
- リンゴ材は、乾燥による収縮が大きいこと、材が堅いことなど加工には教材研究がなお必要である。
- 製品の用途の拡大（小物入れ、壁掛けその他）を検討していけばより売れる製品になるのではないか。
- 小型と大型の二種類を製作したが、大型は加工が難しかった（材が堅い）。
- 底板に穴を開けることで割れをある程度防げるが、材の乾燥を徹底することがなお必要である。